
クロネコ 暁闇戦記-

恭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロネコ 暁闇戦記 -

【ISBNコード】

N2467P

【作者名】

恭

【あらすじ】

代々古くから存在する魔法ライト学園。

そこは現在…前代未聞の不可思議な事件に追い込まれていた。

精霊と魔法が存在するこの世界、フィスタン。

ヒトが生まれながらにして持っている魔力の分だけ精霊と契約ができる。

炎、水、風、地、雷、空間、治癒と光、そして闇が現段階で確認されている魔法の種類。

ヒトに魔法の種類があるように、精霊にもある。

話しを戻し、魔法ライト学園に”精靈を食する魔物”が現れたのだ。
この世界、ファイスタントでは数多くの魔物が存在している。
だが…精靈を獲物とする魔物は世界中のどこでも確認されていなか
つた。

この物語りの主人公、黒沼氷くろぬまひょうは、魔法ライト学園にいるヒト、精靈
を守るべく己の正義のために立ち上がった。

「俺はきっと…この時の為に」

世界中を揺るがす大事件に一人の若者がこの事件の真相を探つてい
く。

* 作者の恭です。

分かり難い所、誤字や脱字がありましたら即お知らせ下さいま
うお願い致します。

* 注意（前書き）

グロテスクなシーンを描写する予定があるため、苦手な方は無理をせずに速やかにお引き取り願います。

* 注意

代々古くから存在する魔法ライト学園。そこは現在…前代未聞の不可思議な事件に追い込まれていた。

精靈と魔法が存在するこの世界、ファイスタント。

ヒトが生まれながらにして持つていて魔力の分だけ精靈と契約ができる。

炎、水、風、地、雷、空間、治癒と光、そして闇が現段階で確認されている魔法の種類。ヒトに魔法の種類があるように、精靈にもある。

話しを戻し、魔法ライト学園に”精靈を食する魔物”が現れたのだ。この世界、ファイスタントでは数多くの魔物が存在している。だが…精靈を獲物とする魔物は世界中のどこでも確認されていなかつた。

この物語りの主人公、黒沼氷くろぬまひょうは、魔法ライト学園にいるヒト、精靈を守るべく己の正義のために立ち上がつた。

「俺はきっと…この時の為に」

世界中を揺るがす大事件に一人の若者がこの事件の真相を探つていく。

* 作者の恭です。

分かり難い所、誤字や脱字がありましたら即お知らせ下さいますようお願い致します。

出発の準備 -

黒髪に金色の瞳。

俺は周りからクロネコと呼ばれてくる。

「クロネコお…本気で行くのがよつー」

涙目を俺に向けて泣きじやぐる男、名はヴィードールといつ。彼とは幼少の頃から一緒に暮らしてきた友人だ。

「ああ…」

クロネコって嫌な響きだ…と思いつながらヴィードールから田舎を背け、荷造りを続ける。

「なら…つークロネコが行くんだけ…つ、俺も行べーー！」

「却下だ」

このやり取りはもう何時間も続いていた。

…だが、荷造りはそろそろ終わる。

本当に、ヴィードールとはもう会えなくなるだろ…。あいつも分かってるからこんなに必至に纏わりついてくるんだ。

「やだつー やだやだやだーーー！」

駄々つ子の様に泣き喚べ、ヴィードールを見ていのは辛い…。

俺も、ヴィードールと離れるのが寂しくない訳じゃないんだ。

ただ…

「だつて…！　だつて、こんなによ…ぐつ、ぐるねこが！死にに行ぐよ、ようなもんじや…」

危険な場所にこいつを連れて行けないんだ。

ヴィードールは、べじゅべじゅの顔で悔しそうに拳を握った。

俺は荷造りが終わり、立ち上がり、ヴィードールを見る。

肌が白く、大きな目は青色で綿のよつてわいたらの髪は金髪、それがヴィードールの見た目だ。

だが…何時間も泣き、目は充血して瞼も腫れ、通るように綺麗な声は枯れてしまい、歯を噛み締めて拳を握りしめる様はとても痛々しい…。

「ヴィードール…」

ヴィードールの震える拳をゆづく解き、歯を口内こしまわせる。

「ヴィードール。さつきにわせてもいい。… 今回はお前を連れていけない。戦闘の邪魔だ」

「つ…。分かってんだって、そんなの俺が一番ね…」

「俺はヴィードールに、幸せに暮らし…」

「ぞけんな！！！ 勝手に俺の幸せを決めんなよっ！」 それぞれに違う幸せがある“んだろう？！” そう言つたお前が、俺の…お、おえの、幸せを…、「

すゞい剣幕で怒鳴りつけるヴィードールに向ひも言ひ返す気にならず、俺はただ眉間に皺を寄せ、ヴィードールの言葉を聞いていた。

ヴィードールは自分を落ち着けるように一息吐くと口を開いた。

「……」

「俺の幸せは、お前と旅して、笑つて、死ぬ時はお前の為か一緒に戦闘で…つーこんなのは、お前に会つた時から一生…変わらない…」

思いをぶちまけて軽く肩で息をするヴィードールを、俺は震む視界で見つめる。

、ヴィードールの言葉は全身を稻妻が駆け巡るようにかなり効いた。

ヴィードールを置いてくなんて簡単だ。

だが…、簡単にこのデカい覚悟を潰してしまつのはとても気が引けたし最低なことだと思った。

…それに、ヴィードールだけじゃねえ。

「…、俺もだ！ばかやろ…」

なんとなく火照っているだらう顔を見られたくなくて、ヴィードールの顔を胸に押し付けた。

「氷っ…」

「…守つてやらねえからな

「当然。俺が氷を守るんだっ…」

照れ隠しへ言つた言葉に、ヴィードールは笑つて強気なことを返す。

「ふはっ…そりゃー楽しみだ」

ヴィードールとまた一緒に呪わられる。

俺は心が嬉しくで満たされるのを感じた。

魔法ライト学園 クロネコの入学 -

ヴィードールの荷造りも終わり、俺達は目的地の魔法ライト学園へ行く直前だ。

「トリックワープ♪空間♪」

魔法詠唱して目を開くと、目の前には大きい門があった。

「リリが魔法ライト学園…」

「思ったよりでかいな」

トンツ！ トンツ！

「君たち。リリ、魔法ライト学園に何の用だ」

「同じく」

学園の大きさに、ヴィードールと呆然としていると、門の付近にいたらしい門番2人に声を掛けられた。

一人は年寄りのお爺さん。

一人は氣怠げに目を閉じた若手だ。

おい、若手の門番。

せめて目は開けた方がいい。

「…それともなんだ？何か開けられない理由でもあるのか？」

この2人、会った時から魔力が全く感じなかつた。

それ故に門番がいた事にも声を掛けられるまで気が付かなかつた…。

まあ、魔力を感じさせないというのなら魔力制御という物を身につければ可能だ。

こいつ等は門番だし。

力を測られて奇襲されたなどでは堪らないだろう。

それを踏まえて魔力を感じさせない方が門番に効率が良い。

「入学を希望しております」

「つ希望しております」

俺に習つてヴィードールも慌てて御辞儀をした。

トンツ！ トンツ！

「ふむ。それぞれ名前、歳、属性、精霊を言え」

「回じぐ

爺さん…話す前に杖を打ちつけるのは何だ?
もしかして突っ込みを求めている…?

胸に手を当てて一步前進して頭を軽く下げる。

「我、名は黒沼 氷と申します。歳は18。属性は空間、精霊
はストレージです」

トンッ！ トンッ！

「下がれ。次

「回じぐ

チラリと、ヴィードールを盗み見する。

…特に門番2人に気を止めてなさそうだ。

なら俺も考えるのはやめておこう。

軽く頭を上げて手を下ろし一步後進すると、ヴィードールが前へ出た。

「我、名はアヴィドールと申します。歳は17。属性は水、精靈はジャップです」

トンツー　トンツー

「下がれ。ジョブ、黒沼殿と手合わせを」

手合わせ……！？

この2人は門番だけじゃなく……審査員も兼ねてるっつうことか？

「おな……承知致しました」

俺が考へてみると若手の門番が初めて違つたり葉を言つた。

……いや、實にどうでもよこが。

「クロネコー頑張れよー！」

「ああ、さよなら」

トンツー　トンツー

「両者向を合つて、……始め！」

戦いが始まった。

……おい、まじかよ。

俺と戦闘になつても、門番らしき奴は目を開けない。

それに仕掛けてくる気配もねえし、余裕つてことか？

((ソード>空間))

心中で詠唱すると、淡く光りを放つ剣が俺の手に握られた。

爺さんが杖を打ちつける音と感心する声を聞き流しながら、若手の門番田掛けて駆ける。

「つ、」

曲がりのない直線的な俺の攻撃は相手が飛び退いたことで空振る。

「くつ、ふふ…楽しくなりそうだ」

久しぶりの強者に血が騒ぎ出す。

初めの一撃と比じられない程素早く動く。

少しは本氣で行くぜつ。

こいつは視力が無い代わりに聽力が凄まじい筈だ。

脳の視力の配分が聽力に注がれていると考えて間違いないだろうな。

息を殺し、俺の周囲から音を消せば門番は確実に俺を見失つ。

((サウニイレース ^ 空間 ^))

スッと俺と俺の周囲から音が消え、一瞬だが門番が動搖したのを見逃さない。

シユ…

「 … やれやれ」

剣が喉に添えられたまま門番は言つた。

「 入学おめでとうござります」

魔法ライク学園 ヴィドールの入学 -

@'ヴィードール side -

「おお！ クロネコおーー入学おめでとやーん！」

俺は距離があるクロネコに大きめの声量で賞賛の言葉を投げた。

「…おう！ 一足先に！」

……んう？

気のせいかも知れないけど、俺はクロネコに違和感を感じた。

クロネコは何かあっても顔や雰囲気じゃ分かりにくくし、戦闘の時はそれこそ比じやないくらい表に出さない。

感情やら考えを読まれたら、”死ぬと思え”…らしく。

今の場合は戦闘じゃないもののその直後だし…距離があるから俺の勘かもしないけど……クロネコが何かを考えてる気がした。

ただの違和感からの考えにすぎないんだけど…。

クロネコが近づいて来た事で俺は思考を止めた。

すれ違う時にパチンとハイタッチをして俺は門番の所へ向かう。

トンツ！ トンツ！

「黒沼殿、合格だ。 次」

バクバク鳴る心臓に手を当てて深呼吸を繰り返す。

不安なんだ…。入学出来るかな、って。

クロネコと旅をしていた時、俺はいつも守られていた。

戦っているクロネコの後ろ姿ばかりを見て、それが当然だった。
そう思つてたけど…そんなの当然じゃないんだ、って魔法ライト学園に行くことを決めた時にやっと気付いたんだ。

今はクロネコの前に立てなくともいい。

せめて…横に並びたい。強くそう思つた。

「…ヴィードール」

「ん？」

「…お前は強ぇよー。お前自身が氣がついてないだけだ！
張つてこー！」

「…頑

クロネコが見透かしたよつとそつと囁く。

自分で中で何かが弾けた氣がした。

俺…、何怖じ氣づいてんだつ！？
学園に入學出来なきや守るも糞もねえだり！
…絶対に入學してやるよつ！

「クロネコー！」

「なんだ…？」

「わやんと睨とむよー。」

ふつと緩められたクロネコの微笑みに俺も笑つ。

……ありがとわ。

クロネコ心の中で囁く。

門番の若い方に駆け寄る。

精神を戦闘に集中させた。

トンッ！ トンッ！

「始め！」

「雷と光の精霊ジャップ、我に力を貸してくれ！」

俺が唱えると光の粒が集つて、そこから純白の虎が現れた。

ジャップの周りではビリビリと電気が弾く。

トンッ！ トンッ！

「ほう…。S級精霊のジャップか、美しい」

門番の爺さんの言葉に内心で頷く。

ジャップは俺と契約した雷と光の精霊だ。

その容姿はとても美しく、本とかにもよく載つていたりする。

何故俺と契約したかは分からぬけど、ジャップにはいつも助けられているんだ。

「融合魔法、水霧へ水く！」

ジャップの周りに霧状の水を放つて弾く電気と合体させる。

水の周りを弾く電気はジャップをより美しくさせる。

「つらあー」

戦闘が始まってからずっと俺の様子を見ていた若い門番に向か、ジャップの周りにある水と電気を放つ。

…………つーーー

……な、つ受け止めたあー！？

若い門番は避ける事もせず、そのまま俺の攻撃を食らった。

箒…なのだが、水は地面に滴り落ち電気は門番の体を弾いていたがやがて消えていく…。

「…ふう。ヴィードール殿も入学おめでとうござります」

呆然としていて聞き逃しそうになつたけど、はつきり聞き取れた。

「……こゆ、入学ー！ ありがとおジャップ

ツーーーーーーー？」

わかつ今までの疑問も考えられなくなる程舞い上がる。

考えることよりも入学出来たことの嬉しさを噛み締めたい。

そして俺は変なテンションでジャップに抱きついて感電して氣を失
いそうになつた。

＜ライズと融合魔法 -

「俺達は無事？に入学が出来た。

「ゴホッ。いやー……いつもジャップの電気は痺れるなー」

ヴィードールは無事がどうかは曖昧だが…。

まあ、水属性のヴィードールが電気に強い抵抗力を身につけて来ているのは本当だし、良しとするか。

「ゴホッ ゴホッ」

そしてジャップは

”やれやれ…いい加減学習しろ”

的な呆れ顔でヴィードールを見ている。

けど…その内側に優しさの温かみがあるのを俺とヴィードールは承知の上だ。

暫くするとジャップから光の粒が現れ、やがて消えた。

トンッ！ トンッ！

「改めて…黒沼 氷殿、ヴィードール殿、入学おめでとうございます」

「同じく

「ありがとう」「じゃこまます」

「あつがとハジゼコモウ...」

トントー トントー

「これはパンフレットだ。魔法ライト学園について分からなっこ
とがあれば見るよ」

「同じく」

俺達は爺さんにパンフレットを手渡された。
それは分厚く、結構重みのある物だ。

…見る気はないな。

「わかりました」

「はーーー」

トントー トントー

「それでだが…疑問に思つ点がある筈だ。ジョブ、説明を」

「お……承知致しました」

「、……説明するってか……？」

確かに疑問が解決された訳じゃねえし嬉しいんだけど……。

わざわざ弱みを握らせる様な真似して、何か企んでやがるのか？

……まあ、まずは聞いてみるか。

「では……黒沼殿。 知りたいことがあれば聞いてトセー」

「ブツ……？」

……俺が聞くのかつ。

てっきり門番が軽く説明して終了だと想つた……。

「おーークロネコー 何黙つてんだ？」

「いや、ちゅうとな……」

顔の前で手を振る、ハイドールに苦笑いを返す。

「ん、そうだな……貴方達は魔法制御の物を身に着けているのですか？」

「いいえ、私は着けておりません。ですが……そちらの門番、ソテイ様は着けておられます」

迷いもせぬ答える門番。

俺は驚きながら頭を回転させる。

爺さんはあの杖が魔法制御であつてゐるだろ？。

わからんねえのは……若い方だな……。

魔法制御以外に魔力を感じさせない例か。

あるいは魔力が無くなる例か。

魔法制御じやないつつうなり……。

これは只の俺の勘だが、……魔力が無くなるつつう方が怪しこと/or>てる。

その例となるものが……不死の者、全身変化、ストーンアイ等。

知つてているのはこれだけだが、他にもあるだろ？。

そしてこののような人達をヘライズと呼ぶ。

俺は見たこともないから詳しく述べられないが……まあ、

不死の者は、魔力を無くす代わりに一生生きてられる」と。

全身変化は、魔力を無くす代わりに自分が思つなりたいモノに変化できること。

ストーンアイは、魔力を無くす代わりに自分が見たものを意志関係なく石に変えることだ。

……ん?

ちよ、ちよっと待て。

俺は……気付いてしまったかも知れない……。

若い門番が目を開けない理由として、妥当なものは……？

「つ、……ストーンアイ」

思わず声に出してしまつ……。

「つー？ それってヘライズの……！」

パチパチ……

「御名答、素晴らしいです。あれだけのヒントで答えを出してし

まつとせ…」

トンッ！ トンッ！

「ハツハツハ！！ 真たちに興味が湧いた！ 今度色々な話しへ聞かせてくれないか？」

笑い出した爺さんに、俺はぐっと眉間に皺を寄せた。

「どうして正体を知られたとここのに笑っているのですか？」

トンッ！ トンッ！

「試していたんだ。洞察力と知識をな」

「自分の正体をかけてですか？ それにもつ合格した筈ですが」

なんなんだこいつ等は…。

トンッ！ トンッ！

「ジヨブ、今度こそすべての説明を……の前に、移動しないか？
ここに立ち話するよりも中に入つて説明しよう」

ヴィードールとアイコンタクトをする。

「 どういへん？」

自 着いて行ひ。

「 把握！」

「 …わかりました。 移動しましょう」

「 トンシ！ トンシ！」

「 では着いておなさい」

ズドゴーハーハオ…

重たそうな音を出して開く門。

「 わあーすげえ重そーう！」

ヴィデールの言葉に頷く。

「 トンシ！ トンシ！」

「 うひちだ」

門番の後についていき、学園の敷地内に入った。

…すゞいつ

沢山の魔力の波動を感じる…。

俺達は学園に入つてすぐのとこ、十階建てくらいの建物に入る。

トンツ！ トンツ！

「ここには門番の人達が暮らす家だ……おーい！ タドリックー！」

「タドリック？」

ヒトの名前か…？ と考えていると、一瞬で目の前にアクセサリーを沢山身に付けた長身の男が現れた。

「つー？」

ヴィードールはかなり驚いている。

長身の男…ここが門番の家ならこいつも門番の一人だらう。そして、こいつも魔力を感じない。

…恐らくはそのジャラジャラのアクセサリーが魔力制御の効果を持つ物だからだらう。

トンツ！ トンツ！

「悪いんだが……今すぐ門に行ってくれ

ジャラ

「……報酬は」

「こつ等会話の前にジャラがなつ……
しかも報酬となるのか！」

トンッ！ トンッ！

「やうだな……あこつ等なんてビーハジや？ ？」

爺さんが指を差す先を辿る。

「 なつ！ 何で俺達を指してゐんですか？ ……」

「……」

ヴィードールが喚べのを聞きながら俺は爺さんを睨む。

トンッ！ トンッ！

「冗談だつて！ ハツハツハー！」

ジヤラ

「…」「解」

俺達を見て頷いた後、アクセサリーの男は消えた。

「……ほほ本氣にしてるつーーー！」

ヴィデールの焦る言葉が響く。

消える間際の男の田…あれは確かに本氣だった。

トソッ！ トソッ！

「まあ大丈夫だろ」

「…理不尽」

もう一度睨みつけてから歩き出した爺さんを追う。

.....

トシッ！ トシッ！

「入れ」

「広いっ！ 豪華つ！！」

はしゃぎわざな程瞳をキラキラと輝かしているヴィデオル。

ちなみに俺達が案内されたのは爺さんの部屋だ。

トシッ！ トシッ！

「座りなさい」

「…失礼します」

「わっ！ やべえ、フカフカすぎー！」

どうみても高級ソファーにそれぞれが座ると、話を始める。

トンツ！ トンツ！

「ジョブ、すべての説明を」

「…承知致しました」

俺の向かいに腰掛けているのが爺さんで、ヴィードールの向かいに腰掛けているのが若い門番だ。

「まず……それぞれの合格理由は知りたいですか？」

「 知りたいっ！」

「つ、…」

いきなり立ち上がり拳手するヴィードールにソファーが波を打つ。
一緒にソファーに座っていた俺はいきなりの事にバランスを崩してしまった…。

「あ、悪い。 気になつても、あーはは…」

「…別に」

すぐに落ち着いたヴィードールは俺に気付くと謝つた。

「では、ヴィードール殿。話しても大丈夫ですか？」

「はい…」

「精靈にランクがあるのを知っていますか？」

「はい」

「では…知つているかもしませんが、S級ランクの精靈と契約する者はもちろん、遭遇する者すら極僅かしかいないのです」

「え、知らないっ…！ そうなんですかっ…？」

「はい。その点も含めてですが、ここからが重要です。ヴィードール殿は当たり前の様に使用していましたが… 精靈と、自分の魔法を融合させる事はとても難しい事なのです」

「…」

「言葉を話せない精靈と意志疎通をし、どちらとも信頼し合っている時に出来るのが精靈との融合魔法です」

「多くの者は精靈との意志疎通が壁で、出来る者は少ないのです。それにランクが上がる程気難しくなるのが精靈…。 S級精靈と

の融合魔法が可能なヒトはほんの一握りしかいないのです。」

「う、……ジャップ」

門番の話の途中で俯いて、ヴィードールは言った。

「……ありがとう」

涙を堪えて呟く言葉は喜びと感動に震えている。

俺は微笑ましい光景に心が温まるのを感じた。

……いつも戦闘になると弱気なヴィードールだが、少しずつ……今も心中で見守り続けてくるジャップのお陰で、確かな勇気をつけていっている。

「これがヴィードール殿の命格理由です。黒沼殿の理由もお聞きしますか?」

「いや、俺は大丈夫です」

それよりも……

「貴方は、ヴィードールの融合魔法を正面から受け止めたにも関わらず、傷一つありませんでした…。どういうことですか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2467p/>

クロネコ 暁闇戦記-

2010年12月9日04時11分発行